

レニャーニのファンタジア Op.19 を使いソナタ形式を学ぶ

曲名/作曲家 Fantasia Op.19 Brillante e Facile/L.レニャーニ

ソナタ形式とは

(序奏)

A 提示部第 1 主題・移行部又は経過句・第 2 主題 (属調や平行調に転調)

B 展開部

C 再現部+終結部

と言う構造で作られた曲を指す。(慣れたらさらに細かく分けて考える)

ソナタと言う名前が付いていなくてもソナタ形式で作られている曲もあれば、ソナタと言う名前がついていてもソナタ形式で作られていない曲もある。

それらの形式により、映画や小説の起承転結と同じような、大きな枠での音楽的ストーリーが構成される。

今回の曲はファンタジア (幻想曲) というタイトルだがソナタ形式の曲である。

「序奏」

【解説】

本編 *allegro* 主調イ長調の同主短調イ短調で書かれています。

この曲の序奏は半音進行や短調の属 9、属音保続低音が使われ、強いドミナントを感じさせます。

これから始まる *allegro* に向けて緊張感や期待感を高めてくれる。

序奏だけでなく頻繁に現れるフェルマータ付きの休符。

これは前の和音の響き・調性の残滓をリセットする目的で置かれているように思う。

利き酒でいうならばお酒が変わる度に口をゆすぐ行為。

【演奏】

作曲的工夫が効果的になるよう、激しい強弱の差、半音進行に意味を持たせるような表現、胸をざわつかせるような属音保続低音が出来ているように思います。

休符につくフェルマータは普通のフェルマータと同じように考えないで、独自の間をシビアにつくらなければいけないように感じました。

恐らく演奏でそれは出来ているのではないかと思います。いかがでしょうか。

「提示部 第1主題」

【解説】

おどろおどろしいくらいの序奏の終わりから一転。

明るい軽快なイ長調の第1主題が始まります。

第2主題というのも通常配置され、第1主題と第2主題は異なる性格で書かれることが多いです。

それぞれの主題の性格を良く理解し、その性格がわかりやすく伝わるように演奏する事が大事です。

序奏で目立った半音進行がこちらでも見られ、それは3小節に渡る2オクターブ間隔の上行など、抑圧された序奏から解放されたような自由さを感じます。

【演奏】

第1主題の活発さは彼の得意とする分野で、伸び伸びとその音楽的性格が活かしていると思います。

右手を良くご覧頂くとかなり頻繁に消音しているのがわかると思います。

快活にという性格や曲調から、素直な和音の時は響きも素直に聞こえるように消音を丁寧に行ってくれました。

「提示部 移行部又は経過句」

【解説】

ソナタ形式の第2主題は主調が長調の場合、属調や平行調に転調します。(時代により変わります)

その繋ぎをする橋のような役割が移行部または経過句となります。

長めの半音進行と2音間を行ったり来たりする半音進行。同じ音の連続。

それらの繰り返しをしつつ、少しホ長調の色が濃くなっていきます。

エネルギーが上がったり下がったりしてどこに行こうか、と音が迷っているようなそんな印象です。

半終止を交え、移行部の結尾といいますか最終楽節は調性が一気に崩れた後ホ長調に向かっていきます。

【演奏】

変化を感じさせる部分。

同じ半音上行進行でもクレッシェンドしたりデクレッシェンドをしたり一定でなく、変化を感じさせるのに相応しいものとなっています。

音のエネルギーが増えたり減ったり。

そしてホ長調へ向かいどっしりと膨らみホ長調半終止。

第2主題に入る良い準備ができています。

「提示部 第2主題」

【解説】

一般的に第1主題が活発、力強い。

対する第2主題は柔らかい、優雅という性格で作られることが多いようです。

この曲の第2主題も今までになかった柔らかさを感じます。

形式というものを学んで何が演奏に活かせるのか。

この第1主題、第2主題の対比的な作られ方の知識は一つの答えかもしれません。

第1主題と第2主題の性格の差を自分はしっかり表現できているか。

そんな意識を持って演奏作りをすると演奏がより良くなるのではないかと思います。

「提示部 第2主題」

【演奏】

彼は、こういった優雅な性格を持つパートは少し苦手だったと記憶しています。

どうしても元気に弾いてしまう。

しかし、今はその特徴をしっかりと捉え弾けています。

成長が感じられる嬉しいパートです。

彼はこの曲をコンクール本選の自由曲として選びました。

コンクールには〇分以内の曲、という時間制限があり、時間内に収めるためこの曲のリピートを何か所か行っていない。

そんな中第2主題のリピートは行いました。

主題という中心的存在であり、第1主題も2回弾くようになっている。

再現部の第2主題も同様。

バランスを取るためそうしました。

「展開部」

【解説】

展開部は調性の変化が多く、不安定な要素が特徴的です。

また、提示部の第1, 2主題をモチーフに音を変化させ展開していく「主題労作」という作曲技法が使われます。

出てくる順番は曲に寄って変わりますが、この曲の場合、まず調性の変化、第2主題をモチーフにした主題労作、第1主題をモチーフにした主題労作。

こういった構成で作られています。

【演奏】

調性の不安定な箇所は3度の半音上行。

半音上がる度に徐々に緊張感を増すクレッシェンド。

彼はこういったものは得意と言うか色々な曲で経験しているので良く弾けていると思います。

主題労作において、モチーフの元となった主題の性格をキープするかどうかは曲によって考察して判断すべきです。

この曲は第2主題をモチーフにした主題労作がハ長調で先に出てきます。

それは提示部第2主題と似た性格であり、表現も似せて良いと思います。

次の第1主題をモチーフにした主題労作。

ここは提示部第1主題よりかなり柔らかく弾いています。

つまり性格を変えています。

第1主題は2オクターブを一気に駆け下りていく形でした。

対してこの主題労作は第1主題をモチーフに緩やかに下行していきます。

動機の開始だけ上げればシラソと順次下行になっています。

そう言った音の動きから、今回は性格を変えても良い、と感じます。

「再現部」

【解説】

提示部の主題が再び現れます。

しかし、第2主題で転調を行わなかったり、従って提示部にあった移行部又は経過句も省略されています。転調がない事で安定して終わりの終結部に向かう場合が多い。

【演奏】

提示部と比べ、今まで曲を弾いてきて乗っているのか滑らかさや勢いが自然な表現で出せています。少し遊び心のようなものも。

第2主題直前の確信に満ちた終止がどっしりとした終止感を出しかっこいいです。

第2主題は提示部よりポジションが上がります。

倍音配分から音色がより柔らかくなり、これが偶然なのか計算なのか興味深いです。

「終結部」

【解説】

滑らかに段階的に上がる、下がる。

音の変化の代表的な動き。

レニャーニは素材として比較的大きなスケールでこの動きを全体に渡って配置したように思います。それらは変化を予感させるものもあれば停滞を感じさせる。

様々な上行下行が終結部で大きく動いていき、音に乗っているようで聞いていて気持ちが良いです。

曲の最後にそれは集約され、壮大に締めくくられます。

【演奏】

ダイナミックな演奏が得意なのでここは彼の得意分野。

325-326小節は楽譜にクレッシェンドの指示が出ていますが、彼のオリジナル表現でデクレッシェンドしており、結果として半終止的な雰囲気となっています。

それにより4小節動機の反復と言う構図となり、反復の後半のクレッシェンドの音量差を大きく出せる良いアイデアでした。

調性、アクセントがずらされる344小節からの怪しげな雰囲気のアルペジオ上行。

明瞭な景色が一時的に霧がかすんでしまうような性格。

多分苦手な箇所だと思いますが、ここの弾き方が良くできていて、だからこそ次の2オクターブ上行、2オクターブ半音下行という大きな音の動きが生きてくると思います。

序奏から終わり方まで終始曲の特徴をとらえ、ソナタ形式の曲としてよくまとめて弾けています。

素晴らしい演奏をありがとうございました。